

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻
交渉紛争解決学領域
堀 律子

【論文題目】 ドナーの抱える葛藤及び困難からみた生体肝移植の現状と課題

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

堀律子氏の論文「ドナーの抱える葛藤及び困難からみた生体肝移植の現状と課題」は、わが国における生体肝移植ドナーが抱える問題について、過去に実施されたアンケート調査結果を踏まえつつ、今回新たに実施する当事者であるドナー及び移植コーディネーターに対する聞き取り調査を通して、ドナー保護の観点から、問題の所在及び問題の発生源を明確にするとともに、その予防策を今後どのように講じるべきかを具体的に論じようとするものである。

第1章「日本における臓器移植の背景」では、日本における臓器移植全般の背景的事情と生体肝移植に関する各国の状況及び日本の現状について確認している。第2章「生体肝移植ドナーに関する調査報告書」（2005年）から見える問題」では、過去に実施されたアンケート調査結果から、1）ドナー決定までのプロセス、2）術後の回復と社会復帰、3）家族関係の変容、に焦点を絞り、問題点の抽出を試みている。第3章「生体肝移植ドナーの現状調査」では、今回の調査に関して協力が得られたA病院において生体肝移植ドナーとなった13名及びA病院の移植コーディネーター経験者3名（現役1名）に対する聞き取り調査の結果を報告し、問題の所在及び問題に対する取り組み状況を確認している。第4章「生体肝移植ドナーの葛藤及び困難をめぐる考察」では、今回実施した生体肝移植ドナーに対する聞き取り調査の結果を詳細に分析している。その際、1）ドナー決定までのプロセス、2）術後の回復及び社会復帰、の2点に絞って論点を整理している。第5章「生体肝移植ドナーの葛藤及び困難からみた課題と対策」では、最終的に問題の所在及び問題発生の源を明確にするために、1）統一的なインフォームド・コンセントと意思確認、倫理審査システムの構築、2）移植コーディネーターの人員確保、の2点に整理して問題発生の予防策について論じている。

欧米諸国における肝移植の主流は脳死移植であるが、わが国における肝移植は生体移植が大部分を占めている。生体肝移植ドナーに対する今回の聞き取り調査の結果、レシピエントの延命手段が移植しかない状況において臓器提供を拒否することは直ちにレシピエントの死を意味することから、一見問題が何もないように見える事例においても、親族という狭い人間関係の枠組みにおいてドナーが決定される際、決定の自発性及び任意性に関して疑問の余地があることが分かった。堀氏はその点を特に問題とする。さらに氏は、生体肝移植ドナーが抱える問題として、こうしたドナーになる意思決定に伴う倫理的問題の他に、術後の身体的・精神的健康問題、社会復帰に伴う周囲の理解や保証といった社会的問題があるとする。

過去に実施されたアンケート調査結果に対して、今回氏が実施した聞き取り調査によって問題が具体的かつ包括的に摘出された点は十分評価できる。第5章の結論部における論点の整理に関して、論者の視点がドナー側に偏りすぎているという難点はあるものの、結果としては、医学の現状においてやむを得ない治療法として位置付けられる生体肝移植のリスクと課題の詳細について、また、課題解決に向けた対応策の詳細について、実現の道筋までは明示できていないが、明確に示し得ていると言える。

学位論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成25年6月21日（18：00～19：20）、文法棟小会議室において、口述試験を実施した。

また、上記の者は、同年6月22日（17：10～18：20）、くすの木会館レセプションルームにおいて、学位論文について公開発表を行った。

その結果、上記の者は、提出された論文に関連する専門領域についてすぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分にあると判断され、審査委員会は、博士（学術）の学位を上記の者に授与するに値すると判定するに至った。

【審査委員会】

主査	岡部	勉
委員	高橋	隆雄
委員	中川	輝彦
委員	石原	明子
委員	渡邊	功
委員	安川	文朗